

Universal Grammar and Second Language Acquisition

(普遍文法と第二言語習得)

関口 智子

Universal Grammar (UG) 理論は、普遍文法を、普遍的な原理 (principle) とパラメータ (parameter) の体系として捉え、自然言語に共通に見られる普遍性を、これらの諸原理によって説明しようとする。また、各言語間に現われる表面的な差異を、複数の選択肢を用いて規定するパラメータという概念によって説明する。例えば、主要部 (head) が補部 (complement) の右側にくるか、左側にくるかはパラメータになっており、これを主要部パラメータ (head-direction parameter) と言う。主要部が補部の左側に位置する言語は主要部先行型言語、右側に位置する言語は主要部後行型言語と分類される。主要部後行型の日本語では、動詞句において動詞が目的語の右側にくる。反対に、主要部先行型の英語では、動詞は目的語の左側にくる。このように英語と日本語では、主要部パラメータの値が異なる。

普遍文法の観点から、言語習得はパラメータの設定に基づいて、核 (core) となる grammar と、周辺部 (periphery)

の rules を習得する過程として捉えられている。第一言語習得の場合、子供は生後外界から取り入れるインプットに照らして、パラメータの値を決定すると考えられる。一方、第二言語習得の場合は、学習者は第一言語と目標言語のパラメータの値が異なる際に、切り替えを行わなければならない。UG は、第二言語習得にも第一言語習得と同じように働くのであろうか。

第二言語学習者のパラメータ値を切り替える能力、第二言語習得におけるUGの有効性に関しては、様々な研究がなされてきたが、議論は結論に至っていない。UG が第一言語と同じく第二言語でも働くという肯定的な見方 (Flynn 1987, 1989, White 1985, 1986 etc.) に対して、第一言語の習得時期から年齢的に離れて第二言語を学習する場合には、前者からの干渉があり、UG は働く力が弱まるか、全く死んでしまうという否定的な見方 (Bley-Vroman 1988, Schachter 1988, 1989 etc.) もあるが、どちらも決定的な証拠に欠ける。UG はある程度まで有効であるが、

完全ではないという中庸説も提案されている。

本論では、UG に基づく第二言語習得理論の先行研究を取り上げ、UG に

基づく第二言語習得研究の本質、問題点、今後の課題などを明らかにする。

(せきぐち ともこ

本学ランゲージセンター英語嘱託講師)